

ヘルマン・トロチックの生涯と神戸外国人居留地

～居留地行事局長の人物像と評価～

田村 太郎

TAMURA Taro

神戸学院大学大学院人間文化学研究科
地域文化論専攻

要旨 ヘルマン・トロチック（1832～1919）は、1872年に神戸外国人居留地をとりしきる居留地会議の行事局長に選出され、1899年に居留地が返還されるまでその職を全うした。これまであまり紹介されることがなかったトロチックの生涯を俯瞰することで、開港当時の神戸外国人居留地にどのような思想や価値観が通底し、それがどのように変化していったのかを研究した。

神戸外国人居留地に関する多くの文献で、トロチックは「ストックホルムの名家の出身で曾祖父は市長」と紹介されている。しかし現地の史料をもとにスウェーデン時代のトロチックの足跡を調査したところ、その事実は確認できなかった。行事局長は居留地会議構成員の投票によって選出されており、日本で初めての自治組織とも評価されているが、トロチックが行事局長に選任された過程からは、新政府や兵庫県で日本側の中心人物となる伊藤博文の後押しや、開港当初の居留地運営の人選に出自や家柄が少なからず影響していたことが推察される。

また、居留地返還の頃には、トロチックの手腕や居留地会議によるまちづくりが高く評価されていたことも確認できた。トロチックの活躍と氏への正当な評価があった神戸の当時の状況は、それぞれに歴史や文化を背負う異質な人々が共存する寛容な都市のあり方について、示唆に富むものといえよう。

キーワード 神戸外国人居留地、行事局、居留地

1. 研究の概要

1-1 研究の目的

開港後の神戸で「居留地会議」の行事局長を27年務めたヘルマン・トロチックの生涯を俯瞰しながら、当時の神戸外国人居留地にどのような思想や価値観が通底していたのか整理を試みる。

1-2 ヘルマン・トロチックについて

ヘルマン・トロチック（Otto Herman Mortimer Trotzig）はスウェーデン・ストックホルムに生まれ、航海学校を卒業したのちノルウェー海軍に所属してヨーロッパとアジアを行き来し、

1859 年に上海を經由して長崎に上陸した。乗っていた船が薩摩藩に売却されることとなり、トロチックはグルーム商会に職を得て長崎に留まった。グルーム商会はのちにグラバー商会に吸収され、長崎で数年を過ごしたのち、トロチックはグラバー商会神戸支店開設を目的として 1868 年の開港直後に来神した。グラバー商会解散後の 1872 年に居留地会議の行事局長に選出され、1899 年に居留地が返還されるまでの 27 年間、その職を全うした。返還後も兵庫県警察部顧問として旧居留地内の派出所上階で暮らし、1919 年に死去した。その他のトロチックの主な経歴は、図表 1 にまとめた。

図表 1 ヘルマン・トロチックの年譜

年	出来事	出典
1832 年	スウェーデン・ストックホルムに生まれる (10 月 25 日)	出生届
不明	ノルウェー海軍に入隊	TJWC 1919
1856 年	イエブレ航海学校を卒業	土居 2007
1859 年	イギリス汽船イングランド号で長崎に上陸	TJWC 1919
1860 年	アーノルド商会に就職	土居 2007
1862 年	アーノルド商会を吸収したグラバー商会の社員となる	谷口 1986
1865 年	井上多聞 (馨) からの相談に応じ、高杉晋作と伊藤俊介 (博文) の密航を手引きか (2 月)	草山 1984
1868 年	グラバー商会神戸支店開設のため来神 (3 月) (5 月 16 日) 伊藤俊介と再会	神戸又新 1918 堀・小出石 1980 草山 1984
1872 年	グラバー商会神戸支店閉鎖 (前年に倒産)、居留地行事局長兼警察署長に就任	草山 1984
1873 年	「居留地行事警察規則」を起草	草山 1984
1882 年	日本人警官 9 人を採用、行事警察署を居留地警察署に改称	草山 1984
1887 年	一時帰国しイーダと結婚、ドイツ国籍を取得 (3 月)	草山 1984
1888 年	イーダと再来神 (10 月)	草山 1984
1889 年	長女ベルタが生まれる (7 月) (4 月)	草山 1984 (土居 2007)
1890 年	次女ジューンが生まれる (12 月)	土居 2007
1891 年	長女ベルタ、次女ジューン死去 (コレラによると思われる)	草山 1984
1895 年	三女イネツが生まれる	草山 1984
1899 年	居留地返還、兵庫県警察顧問に就任 (7 月)	草山 1984
1908 年	勲五等双光旭日章を受章	土居 2007
1914 年	勲四等瑞宝章を受章	草山 1978
1918 年	イネツ、東京のガ德里ウス商会副社長 Stenberg と結婚	草山 1984
1919 年	東京のイネツの家で転地療養中に死去 (7 月 18 日)	TJWC 1919

TJWC は THE JAPAN WEEKLY CHRONICLE

1-3 先行研究

神戸外国人居留地に関する研究は数多く存在するが、建築や文化、スポーツに関するものが中心であり、居留地で活躍した人物についての研究も、建築家や宣教師、貿易に関わるものが多く、居留地の事務や運営に関する研究やそれらを担った人物についての研究は少ない。

神戸居留地の自治組織の機能や事務について取り上げた先行研究には、都市形成における自治について日本の都市関連制度との関係に軸を置いた小代 (2014)、近代警察の形成や警察権の回

復過程を整理した草山（1984）や警察政策学会（2016）などがある。

トロチックに関する専論は、兵庫県警察本部警察資料室に在籍した草山巖の「居留地警察署長 H. トロチック略伝」『歴史と神戸』91号（1978年9月・神戸史学会）のみで、同じく草山巖の『兵庫警察の誕生－幕末から明治の世相－』（1984年7月・慶應通信）の一節でさらに詳しい記述が見られるが、いずれにも記述の根拠とした資料や参考文献の記載は見られない。

草山によるトロチックに関する記述は、1967年に兵庫県警察本部に着任し神戸居留地の警察事情に関心を寄せた武藤誠が部下に調べさせたトロチックの業績調査資料と、1977年に来日したトロチックの孫、ウメ・ラドブルッフが持参した資料が元となっているとみられる¹⁾。

1-4 問題の所在と本稿の構成

多くの先行研究がトロチックを「曾祖父が市長を務めたストックホルムの名家の出身²⁾」としており、まずはストックホルム市のアーカイブやアメリカに移住したスウェーデン人の家系図共有サイトの情報などをもとにトロチックの出自について検証した。

続いて長崎時代の史料、トロチックが活躍した当時の新聞記事³⁾、および神戸居留地の自治組織に関する先行研究に散見されるトロチックの情報を拾い、トロチックの生涯について体系的に整理した。また、複数の文献で「トロチックが行事局長として居留地の運営で中心的な役割を担ったのは伊藤博文の強力な後押しによる⁴⁾」との記述があることから、トロチックと伊藤との間にどのような関係があったのか、史料から推察を試みた。

これらの研究を通じて、これまで注目されることが少なかったトロチックの事績と氏への評価をたどることで、開港から居留地返還の頃までの間に神戸においてどのような思想や価値観が通底し、どのように変化したのかを整理し、外国人居留地が神戸や日本の地域社会に残した示唆を明確にすることを試みた。

2. ヘルマン・トロチックの生涯

2-1 「曾祖父」モーテンについて

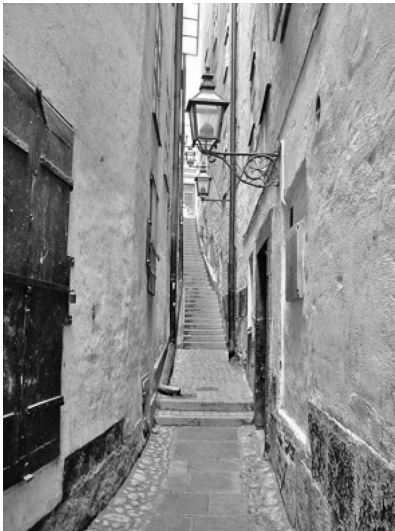
神戸外国人居留地について書かれた文献に散見されるトロチックの紹介は、すべて「ストックホルムの名家の出身」としており、また「曾祖父モーテンはストックホルムの市長を務め、その名を付けたモーテン・トロチック通が、王宮に近い旧市街にある⁵⁾」とされている。ただ、その根拠については、どの文献にも記述が見られない。

曾祖父が市長を務めたストックホルムの名家の青年が、なぜ日本を目指し、なぜ27年の長きにわたって神戸外国人居留地の行事局長を務めることになったのか。まずはトロチック家が「名家」と言われる根拠となった曾祖父、モーテン・トロチックについて調べた。

モーテン・トロチックの名を冠した通りは図表2のような細い路地で、現在もガムラスタン（旧市街）にある有名な観光名所である。ガムラスタン地区の歴史をまとめた報告書⁶⁾に、モーテンについて次のような記述があった。

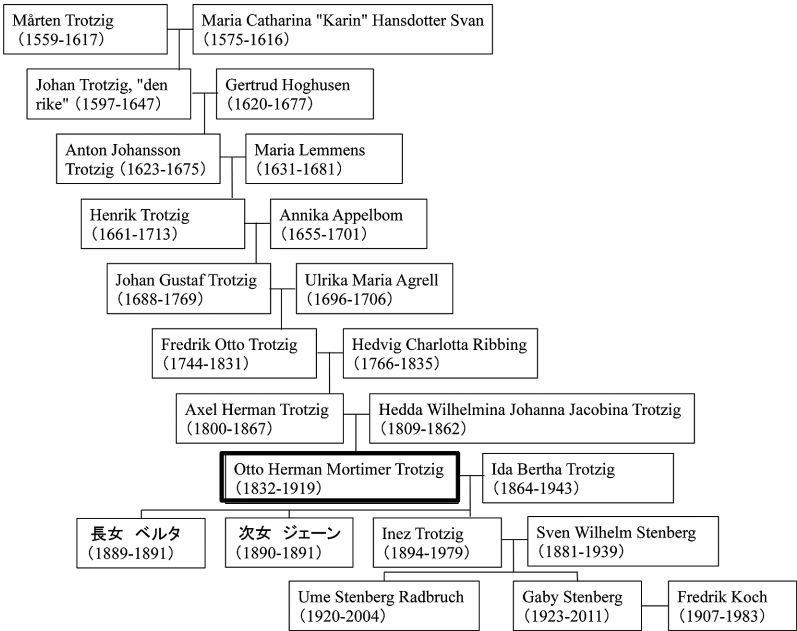
モーテン・トロチックは1559年に（ドイツ東部の）ヴィッテンベルクに生まれ、1587年にストックホルムに渡り鉄や銅を扱う商人として頭角を現した。1595年までに市民の誓いを立て、後にストックホルムで最も裕福な商人の一人になった。1617年に（スウェーデン

図表 2 ストックホルム旧市街にあるモーテン・トロチック通り



(2006 年 撮 影・https://en.wikipedia.org/wiki/Mårten_Trotzigs_Gränd#/media/File:Marten-Trotzigs-Graend.jpg)

図表 3 モーテンからヘルマンと子・孫の家系図



ストックホルム市アーカイブおよび My Heritage 社の家系図作成・共有サービス、草山（1984）を元に田村作成

の) コッパルベルクへの旅行中に撲殺された。() は筆者挿入

モーテンが有名な商人であったことは事実のようだが、この報告書からも、ストックホルム市の過去の市長の記録からも、モーテンが「市長」であったという事実は確認できなかった。

次に、モーテンとヘルマン・トロチックとの関係について、ストックホルム市のアーカイブやアメリカの企業が運営する家系図サービスをもとに、家系をさかのぼってみた。図表3のとおり、ヘルマンから数えて7代前の先祖にモーテンの名があったが、曾祖父ではない。また、父アクセルからモーテンまでの間にも、市長などの履歴のある人物は見られなかった。

トロチックが「曾祖父は市長だった名家の出身」という話は、兵庫県警察本部の業績調査と1977年に来日した孫のウメの談話や持参した資料を根拠としていると考えられる。モーテン・トロチックは元市長ではなく、ガムラスタン地区の歴史をまとめた既述の報告書によると、その名を冠した通りもヘルマン・トロチックが生まれた19世紀半ばごろは歴史的な建造物も荒れた状態で放置され、スラムと認識されていたようである⁷⁾。

モーテン・トロチックは曾祖父でも市長でもなく、またその名を冠した通りもヘルマン・トロチックが生まれた頃には廃墟のような場所だったとすれば、ヘルマン・トロチックの出自についてなぜそうした事実とは異なる通説が定着したのだろうか。

トロチックは2代目の行事局長で、コブデンというイギリス人の前任者がいた。コブデンの行事局長への任用について、居留地会議の会頭を務めたジョン・カーリー・ホールは、ジャパンクロニクル紙が1918年に編集発行した『ジュビリーナンパー 1868-1918』のインタビュー記事でこのように述べている。「コブデンが任用されたのはその任務に対して特別な才能があるからというよりも、多分に自由貿易の熱心な主唱者であるリチャード・コブデンの甥だからという理由によると私は思っている⁸⁾」。

神戸居留地会議の議事録は現存しておらず、また居留地会議の議事概要を掲載していた『THE HIOGO NEWS』も、トロチックが行事局長に選任された1872年当時の発行分は保存されていないため、選任のプロセスを一次史料から確認することはできなかった。しかしホールのインタビューが掲載されている『ジュビリーナンパー 1868-1918』の記事の中に、トロチックが行事局長に選任された1872年の居留地会議での投票結果が記述されていた。投票結果は、E・H・ウエルトン4票、C・シュネベル1票に対し、トロチックが5票であった⁹⁾。

前任者が著名な家柄であったゆえに任用されたと考えられていたことや、投票数が僅差であったことなどからも、トロチックが「名家の出身」「曾祖父が市長」といった事実とは異なる出自を語った背景には、当時の神戸居留地における要職への就任には、それなりの家柄や身分を誇示する必要があったことが推察される。

2-2 スウェーデン時代のトロチック

モーテン・トロチックの死から200年以上経った1831年に、ヘルマン・トロチックは生まれた。ヘルマン・トロチックに関する史料について、ストックホルム市の文書アーカイブを調査したところ、3点を確認することができた。1点目は出生届（図表4）で、アクセル・ヘルマン・トロチックとその妻ヘドヴィグ・ヴィルヘルミナの息子としてストックホルムのマリア教区で生まれたと記されており、生年月日は1831年10月25日だった。生年月日について、田井（2013）は「1831年6月4日」としているが、草山（1978）など他の文献では「1831年10月25日」としており、後者が正しいことが確認できた。

ストックホルム市のアーカイブで確認できた他の2点の史料は、地元のマリア・マグダレナ教会で洗礼を受けたことを記した教会の記録と、一家が1840年にストックホルムからカールスクローナへ転居した際の記録だった。トロチックがストックホルムで過ごしたのは9歳まで、

図表 4 ヘルマン・トロチックの出生記録



(ストックホルム市のアーカイブより)

図表 5 トロチック家に関するスウェーデン国内の都市



ということになる。図表 5 に関連する都市を地図に記した。

カールスクローナはストックホルムから南西に約 380km 離れた軍港で、1750 年には人口 1 万人を超えるスウェーデン最大の都市であった¹⁰⁾。その後のトロチックは「ノルウェー海軍に入隊して中尉に昇進¹¹⁾」し「1856 年にイェブレ航海学校を卒業¹²⁾」したとされるが、史料で確認することはできなかった。一方、トロチックの父・アレックスの 1840 年に撮影されたものとみられる写真が、ノルウェーに近いボーフツレン博物館に所蔵されていることがわかった(図表 6)。裏面には「少尉 (Underlöjtnant)」と書かれており、軍人だったと考えられる。父アクセル

図表 6 ヘルマン・トロチックの父アレックスと思われる人物の写真



https://www.europeana.eu/en/item/916105/bhm_photo_UMFA53226_1668

については、先行研究や文献では「税関吏」¹³⁾や「長く税関長を勤めた」¹⁴⁾としているが、こちらでも事実確認はできなかった。

1840年代のスウェーデンでは、鉄道や電信・電話、郵便制度、航海のような最新領域と関わる職業教育・訓練は厳密に統制されており、国家によって直接的に提供された。航海学校は1840年代に始まり、電信技手（1870年代）、郵便局の従業員の訓練（1903年）よりも早くスタートしている¹⁵⁾。

こうしたトロチック家の転居記録および父・アレックスの写真などの史料から、トロチックの父は海軍の関係者であり、トロチックがノルウェー海軍に入隊したり、開設間もない航海学校で技術を学んだりすることに影響したと推測される。なお、スウェーデン時代にトロチックがその後の行事局長として手腕を振るうこととなる行政や警察分野での教育を受けたり、経験を積んだりした記録は確認できなかった。

ノルウェー海軍に入隊したはずのトロチックだが、1859年にイギリス船籍の商船「イングランド号」で極東航路に出向くこととなった¹⁶⁾。航海学校を卒業してトロチックが士官となった当時、スウェーデンとノルウェーは同君連合のもとにあり、多くのノルウェー船が貿易に従事していたが、トロチックは軍艦でもノルウェーの船でもなく、イギリス船籍の商船の乗組員となり、なぜ日本に向かうことになったのだろうか。この事実は、トロチックが「ストックホルムの名家の出身」という通説とは異なる来歴であることを示しているようにも思われる。

2-3 長崎時代のトロチック

トロチックが乗った「イングランド号」は1856年にグラスゴーで建造されたイギリス船籍の蒸気船で、1861年に薩摩藩が128,000ドルとこれまで最高の価格で購入した¹⁷⁾とされる。はじめて日本に到着したときの様子について、後日、80歳を越えたトロチック本人が、神戸又新日

図表 8 1865 年 5 月 24 日に長崎港外の「ねずみ島」で撮影された集合写真。中央左手の黒いあごひげを蓄えた男性がヘルマン・トロチック



(長崎大学図書館所蔵：谷口良平氏提供、矢印は筆者加筆)

スウェーデン公使館がトロチックに送った書簡は次のような内容だった²⁰⁾

1911 年 1 月 26 日 スウェーデン公使館 神戸 トロチック殿

拝啓 同封の井上馨侯爵自署入り肖像は、かつて貴殿が長崎において、井上候と伊藤公を暗夜小舟に乘せ、外国船に案内し、かの有名な候のヨーロッパ旅行を実現にみちびいた記念として、貴殿に贈られるものです。井上候から貴殿によりしく伝えるようとのことで、御健勝でおすごしのこととお察しすると申されておりました。敬具（公使署名）

これに対して土居は次のように反論している²¹⁾。

井上馨が自署入りの写真をスウェーデン公使に託し、トロチックに礼を述べているから、井上らとトロチックとはなんらかの関係があったと思われる。そのことは否定しない。しかし、密出国から約 50 年経過した時点において、井上に記憶違いがなかったとは言い切れない。それはトロチックについても同じことが言える。井上らが横浜から密出国したことについての精度が高い史料がある以上、長崎から出国したと認めるわけにはいかない。

確かに井上ら長州藩士の渡欧は横浜からの密出国であることはよく知られているところであるが、1864 年に下関戦争の敗戦処理を担当した高杉晋作と井上馨が、英国からの賠償金請求を幕府に転嫁し、翌 1865 年に長崎に出向いて薩摩藩の名義で軍艦や小銃を購入していることも広く知られている事実である。この際、「グラバー商会は井上から高杉と伊藤の渡欧を相談され、上海にいて不在だったグラバーに代わりトロチックが対応した、高杉は渡航資金一千両を用意しており、2 月の夜に高杉、伊藤らを上海へ密航させたが上海でグラバーから説得され渡欧は断念して帰国した」と草山は書いている²²⁾。このことの真偽について、土居は言及していない。

1908 年にグラバーは勲二等旭日重光章を、トロチックは勲五等双光旭日章をそれぞれ同じタイミングで受けていることから、長州藩士の渡欧について井上はトロチックからなにがしかの恩義を感じるような手助けを受けたと考えられるが、史料ではそうした事実を確認することはできなかった。

3. 居留地行事局長ヘルマン・トロチックの仕事

3-1 来神直後のトロチック

1868 年に神戸に着いたトロチックは、まだ未整備だった居留地内に拠点を確保することができず、宇治川の農家で荷を解いたとされる。このときの様子についてトロチックは、神戸又新日報のインタビュー記事で次のように語っている²³⁾。

人家と云ったら山手に百姓家が五六軒と浜辺に漁師の苦屋が只二三戸あるきりで今の栄町も幅は僅かに一間足らずまるで野道同然でここに木造の倉庫が二三棟あったに過ぎない。自分は宇治川の或百姓家一室を借りて神戸に神輿を下ろした。

草山はここでトロチックと伊藤が偶然再会したとしている²⁴⁾。確かに伊藤は同年 3 月 13 日に新政府の参与として外交交渉を担当し、5 月 3 日には大坂府判事兼外国官判事となって兵庫裁判所総督を兼任したのち、5 月 23 日に兵庫裁判所を廃止して兵庫県知事専任となっている²⁵⁾。また草山は「トロチックは伊藤の推挙で居留地行事局長に任命され、居留地における警察行政の最高責任者となった」と記述している²⁶⁾が、伊藤とトロチックとの具体的な関係を示す史料はこれまでに確認できなかった。

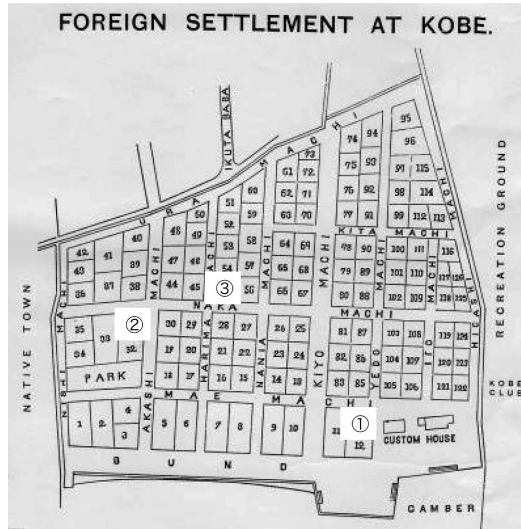
ただ一点、伊藤とトロチックとの関係が思量される事実を、1868 年 9 月に行われた神戸居留地第 1 回の競売の記録に見いだすことができた。神戸の開港は他の開港場より 8 年も遅れたうえ、幕府の崩壊により新政府として初めての競売でもあり、また長雨の影響で予定より大幅に遅れる中で行われた。失敗することはできない大一番であり、伊藤知事の指示に従って慎重に行われた。競売の標準価格は坪あたり 8 分であったが、最高値が付けられたのは 84 番で、坪 32.25 分という値でグラバー商会が落札している²⁷⁾。海岸通りの 1 番から 10 番でも坪 10～15 分、84 番に隣接する 12 番が坪 19 分で落札されていることから、グラバー商会の落札価格は異様に高いことがわかる。図表 9 に居留地の区割りとトロチックに関連した場所を整理した²⁸⁾。

伊藤にとって失敗できない居留地の競売において、グラバー商会神戸支店の責任者であったトロチックが異様な高さで 84 番を落札した事実は、神戸居留地建設初期における伊藤とトロチックの関係を推察するうえで、注目すべき事実と考える。

3-2 行事局長としてのトロチックの評価

行事局長の仕事について、居留地会議で規定のようなものがあっただけの様子は伺えないが、トロチックの前任コブデンの頃は行事局長の仕事は多岐にわたり、月例の会議に欠席することも多かった²⁹⁾という。しかし 1872 年に 2 代目の行事局長に選出されたトロチックは、前年の末に神戸居留地にあった関門が取り払われ、それまで居留地の警備を担当していた諸藩の藩兵たちが引き上げることとなったため、居留地の治安の維持が重要な任務となったようである。

図表9 1891年頃の神戸居留地の区割りとトロチックに関連した場所



- ①第1回競売でグラハマー商会が落札した84番
②行事局の建物があった38番
③当初、行事局警察が置かれた55番
(ジャパン・アーカイブズ <https://jaa2100.org/entry/detail/057737.html> に加筆)

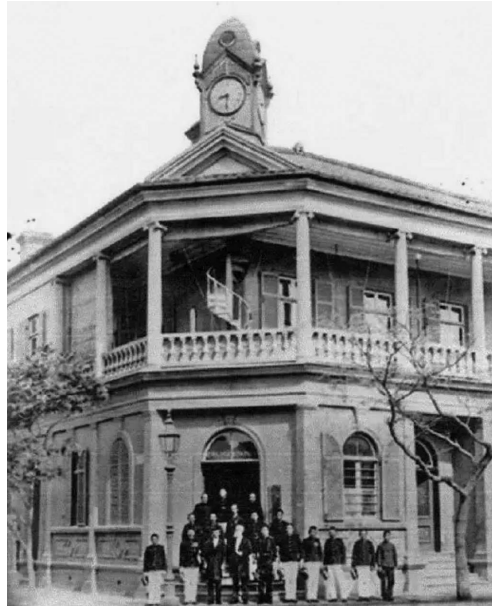
居留地の治安の維持については、先行して開港した横浜や長崎では財政上の理由から日本側に委託せざるを得ない状況であった。しかし当時は日本側も警察事務は近代化の途上にあり、何かと問題を抱えていることを知ったトロチックは、完全な自治警察の確立を目指した³⁰⁾。1873年には仲町55番に「行事警察署」を開庁するとともに、兵庫県と連携して「行事警察規則」を起草し、独自の警察機構を整えた。

翌 1874 年には警察署を明石町 38 番に竣工した行事局の庁舎³¹⁾へ移転しているが、この庁舎には留置所もあったことが知られている。警察署の開庁後はトロチックが警察署長を兼務し、以後、トロチックは「居留地の警察署長」として居留地の外国人や日本人から広く認識される存在となった。

トロチックが日本側から評価されていたことが感じられる出来事が、行事局長 27 年の任期の最後に記録されている。居留地の返還にあたって行事局は 1,471 円 14 銭の残余財産があったがその処分について、会議に出席した大森鐘一兵庫県知事がトロチックと警察官らに分配してはどうかと提案し、出席者の満場一致で配分を決めたことが、居留地返還式の直前、1899 年 7 月 15 日の居留地会議議事録³²⁾に掲載されている。また居留地が返還された後もトロチックは兵庫県雇となり、警察顧問として「明石町巡查派出所」となった元の警察署の 2 階に居住し続けていることから、兵庫県、とくに警察関係者は氏の業績を高く評価していたことが伺える。図表 10 は長崎時代の写真と同じ角度で長いひげを蓄えたトロチックが、最前列中央に写っている居留地返還の日の行事局での記念写真である。

トロチックが行事局長に就任した開港から間もない頃は、実力や人柄よりも出自や家柄が重んじられる風潮が神戸居留地にも存在した。しかし『THE HIOGO NEWS』に散見される居留地会議の議事録や記事からは、居留地の治安維持や排水溝の整備に代表される感染症対策、消防団の設立などに、歴代の兵庫県知事と連携しながら奔走するトロチックの誠実な姿が見受けられ

図表 10 居留地返還の日の行事局での記念写真左から 4 人目がトロチック



(神戸史文書館蔵)

る。多様な外国人が民主的なプロセスでまちづくりに参画し、また居留地の自治にも兵庫県が協力関与してきたこと、トロチックも居留地の警察に日本人を採用するなど、日本社会との連携・協働を重視した居留地運営に心がけてきたことなどから、30 年の年月を経て神戸居留地では国籍や家柄ではなくトロチックの人物や仕事を高く評価する思想や価値観が形成されていたと考えられる。

3-3 トロチックと家族のその後

トロチックは 1887 年に許嫁と結婚するために一時帰国し、32 歳も年下のイーダとともに翌年に再来神している。ただ、それ以前の私生活に関することは何の記録も確認できない。結婚に際してトロチック夫婦はともにドイツ国籍を取得している。当時のスウェーデンでは年の差が開きすぎていると結婚が認められなかったことが理由とされる³³⁾。

イーダとの間には 1889 年に長女ベルタが、1890 年に次女ジェーンが誕生するも、1891 年 9 月の同じ日に亡くなった。この年は神戸でコレラが蔓延しており、2 人が亡くなった理由もコレラが原因と推察される。

1894 年に生まれた三女イネツは無事成人し、1918 年に東京のガデリウス商会副社長ステンベリと結婚した。1923 年の関東大震災でステンベリ家は被災し、「当家の持ち物のほとんどは焼失した」とイネツの子でトロチックの孫にあたるウメ・ステンベリが 1977 年に兵庫県警察本部長の武藤に宛てた手紙で記している³⁴⁾。

トロチックの死後、イーダはスウェーデンに帰国し、日本の茶の湯を初めて外国語で紹介した人物として知られる。イーダは日本滞在中の日記を残しており、娘イネツが保管していた一部を孫のウメが英訳して来日時に持参した内容を草山が日本語に訳して紹介している³⁵⁾。その内容からは、居留地の社交界になじめないイーダの心の内を読み取ることができる。

図表 11 トロチックの墓碑がある神戸外国人墓地小野浜地区5区の遠景（左）とトロチックの墓標（右）



（2024年1月5日 筆者撮影）

トロチックの墓碑は修法ヶ原の神戸市立外国人墓地の「小野浜地区」にあり、いまでも墓参することができる。この地区は、旧生田川河口にあった「小野浜墓地」から当時の姿を損なうことなく移設されたものとされる。小野浜の外国人墓地は開港直後に設置され、行事局が管理していたが、1899年の居留地返還と同時に神戸市が管理することとなった。返還前から飽和状態だったことや、生田川の氾濫で墓碑や遺体が流される危険があったことから、行事局は山側への移設を要望してきた。居留地返還に先立つ1899年4月、神戸市は各国領事と「神戸外国人墓地に関する覚書」を交わし、葺合村春日野を新たな外国人墓地とすることを決め、以後、小野浜への埋葬は禁止された³⁶⁾。

トロチックがなくなったのは1919年であり、本来であれば小野浜墓地への埋葬は許可されないはずである。「神戸外国人墓地に関する覚書」には小野浜墓地について、「先塋の側に埋葬を欲するものに限り、料金を徴して特に之を許可することとせり」との記述があり³⁷⁾、トロチックの墓碑には本人の生年月日、来日した年月日、死亡した年月日とそれぞれの場所、神戸で幼くして亡くなった2人の娘の名前と亡くなった年月日が刻まれていることから、春日野ではなく2人の娘とともに小野浜に埋葬されたと考えられる。

トロチックの墓碑に隣接する地区には、十字架や聖書をあしらったものや生前の故人を偲ぶ言葉が刻まれているものも見られるが、彼の墓碑には信仰や生前の個人に関するメッセージは何もない。トロチックは1873年にフリーメイソンに入会しており³⁸⁾、神戸外国人墓地内にあるフリーメイソン会員の墓碑にはコンパスと直角定規をデザインしたシンボルが刻まれたものが多いが、それもなし。同時代に活躍したアレキサンダー・キャメロン・シムの墓碑には、友人代表からの「A True Man」というメッセージが添えられているなど、外国人墓地の墓碑は多種多様である。そうした墓碑群のなかであってトロチックの墓碑はたいへん質素であり、そのことは生前の彼が特定の信仰心に肩入れせず、また自身の業績を声高に誇ることもなく、居留地の自治に身を捧げて評価を得たことを証明しているようにも思われる。

4. おわりに

スウェーデン出身の若者が長崎を経て神戸を訪れ、日本の大きな転換期にキーパーソンとなった伊藤らとの交流を通じて「東洋一のまちなみ」と称される神戸居留地のまちづくりにその生涯を捧げたことは、もっと広く人々に知られて良い史実だと思われる。

本来は主権国家であるはずの日本に 30 年にわたって存在した外国人居留地の自治・警察組織に対して、日本側は自治を縮小させる方向で圧力をかけたり、残余財産を取り込んだりといった行動をとることもできたと思われるが、本文中で取り上げた事実からは、居留地の第 1 回競売から返還時の引継ぎまで、双方に協力関係が構築されている様子が窺える。幕府と外国側との対立の元に開港された横浜や長崎と異なり、神戸では当初から日本側の新政府の中心人物である伊藤と、居留地側の中心人物であるトロチックとの近い関係があったことも、そうした関係の元に居留地の自治が 30 年続いた要因の 1 つと言えるのではないだろうか。伊藤とトロチックとの関係については、確証を持てる史料を発見することはできなかったが、草山が根拠としたであろう兵庫県警察本部の業績調査や、孫が持参した手記になにがしかの記述があると思われ、その行方を今後も追いたい。

トロチックが行事局長を務めた 27 年間、居留地会議が決定したことの多くは居留地内の街路や排水溝、水道やガスの整備といったインフラに関することと、新政府や兵庫県が徐々に整備を進めた警察機構と調整しながら取り組んだ防犯・治安維持の活動、頻繁に発生した火災に対応するための消防に関するものであった。

居留地では初期の主要な輸出品であった茶葉を煎じる作業場が点在し、そこから出火する火災が少なくなかった。トロチックが自宅兼職場とした行事局事務所も、火災で焼失している。またコレラなどの感染症も度々蔓延し、公衆衛生も大きな課題であった。こうした課題の解決にトロチックがとくに力を入れて取り組んだことの背景には、感染症で 2 人の子どもを失ったり、火災に遭ったりした個人的な経験も影響したと推察される。またトロチックの神戸での公私にわたる歩みは英字紙だけでなく、神戸又新日報でも時折紹介されており、居留地の自治を取り仕切る行事局長、そして警察署長の人柄は広く市民にも知られていたと思われる。

行事局長は居留地会議構成員の投票によって選出されており、日本で初めての自治組織とも評価されているが、トロチックが「ストックホルムの名家の出身である」と出自を飾る必要があったことなどから、神戸外国人居留地の当初の運営は人物本位ではなく、身分や家柄が影響していたことが伺える。一方、開港から 30 年が経過した居留地返還の頃には、家柄や経験に乏しくとも行事局長の任務を全うしたトロチックが評価されていたことも確認できた。家柄や国籍に関係なく居留地の自治が円滑に進められた姿から、神戸の多くの市民、とりわけ警察や治安、自治を管轄する行政は、直接間接に大きな影響を受けたのではないだろうか。

近代都市自治の基本は「衛生」と「治安維持」である。神戸居留地の自治を日本側行政との協働により両者を推進したトロチックの事績は、近代都市における自治の萌芽として大きな意味がある。トロチックの活躍と氏への正当な評価があった神戸の姿から、多様な人々が共存しながら自治を推し進める「寛容な都市」のあり方を再発見し、不寛容が跋扈する今日の状況から抜け出す出口を見いだしたい。

謝意

スウェーデン時代のトロチックに関連した資料調査に協力してくださったストックホルム市アーカイブス担当の Gustav Lantto 氏、長崎時代の資料提供や調査の相談に乗ってくださった神戸外国人居留地研究会の谷口良平氏、トロチックの墓標をご案内くださった神戸市建設局公園部森林整備事務所の榊原均氏に心から感謝申し上げる。

注

- 1) 草山（1984）P.240～268 なお、兵庫県警察本部に当時の資料が保管されていないか問い合わせたが、存在していないとの回答だった（2023 年 7 月 13 日）
- 2) 例えば土居（2007）P.129 や谷口（1986）P.92
- 3) THE HIOGO NEWS、THE JAPAN WEEKLY CHRONICLE、神戸又新日報の 3 紙からトロチックに関する記事を検索した。
- 4) 例えば草山（1978）P.21 や谷口（1986）P.96
- 5) 土居（2007）P.129
- 6) Kommittén för Stockholmsforskning（1992）P.62
- 7) 注 6）に同じ
- 8) 堀・小出石（1980）P.247
- 9) 堀・小出石（1980）P.112
- 10) カールスクローナの軍港 講談社 世界遺産詳解（2011）
[https://kotobank.jp/word/ カールスクローナの軍港-1496725](https://kotobank.jp/word/カールスクローナの軍港-1496725)（2024 年 3 月 28 日閲覧）
- 11) THE JAPAN WEEKLY CHRONICLE 1919 年 7 月 24 日のトロチックの死亡記事より
- 12) 土居（1978）p.129
- 13) 谷口（1986）P.92
- 14) 草山（1984）P.246
- 15) 坂本学之訳（2010）p.61
- 16) THE JAPAN WEEKLY CHRONICLE 1919 年 7 月 24 日のトロチック追悼記事
- 17) 坂本（1983）P.459
- 18) 神戸又新日報（1918）
- 19) 草山（1978）P.20
- 20) 草山（1978）P.23
- 21) 土居（1978）P.27
- 22) 草山（1984）P.247
- 23) 神戸又新日報（1918）
- 24) 草山（1984）P.248～249
- 25) 三上（1964）P.9
- 26) 草山（1978）p.21
- 27) 堀博・小出石（1980）P.65-66
- 28) 神戸居留地の通りの名称は「京」「浪花」「江戸」といった地名や「前」「中」「北」といった位置でつけられているが、「伊藤」のみ、博文の名字を冠している。トロチックが伊藤と親密な関係にあり、ストックホルムに自らの名字の通があることを話したとすれば、伊藤はそれにヒントを得たことも推察される。
- 29) 堀・小出石（1993）P.247
- 30) 草山（1984）P.249
- 31) 庁舎の竣工は 1873 年 11 月頃と推察される。（谷口 2023 P.36）
- 32) The Kobe Weekly Chronicle 1899 年 7 月 19 日号
- 33) 土居（2007）P.130

- 34) 草山 (1984) P.244
- 35) 草山 (1984) P.258～268
- 36) 神戸市役所編 (1924) P.411
- 37) 神戸市役所編 (1924) P.411
- 38) 孫のイネツが所蔵する会員登録証明書を「神戸のフリーメーソン」の解説及び脚注で紹介 (堀博・小出石 1980 P.99)

一次史料

- ・ Överståthållarämbetet för uppbördsärenden, (ストックホルム市収集事項管理監督局) År 1831, SE/SSA/0031/06/G 1 BA/G 1 BA:30/19 (1831), bildid: S0000536_00218
- ・ Överståthållarämbetet för uppbördsärenden, (ストックホルム市収集事項管理監督局) År 1840, SE/SSA/0031/06/G 1 BA/G 1 BA:39/12 (1840), bildid: A0057234_00638, nr 1063
- ・ Maria Magdalena kyrkoarkiv, Födelse- och dopböcker, huvudserie (マリア・マグダレナ教会アーカイブ、誕生と洗礼), SE/SSA/0012/C I a/12 (1819-1833), bildid: C0055205_00280
- ・ Public Record Office (英国公文書館) FO 796/203 *Registry of foreigners in British Employ*
- ・ THE JAPAN WEEKLY CHRONICLE 1919 年 7 月 24 日 *DEATH OF MR. HERMAN TROTZIG.*
- ・ 神戸港の今昔 永住五カ国人談. 神戸又新日報大正 7 年元旦号. 1918-01-01
- ・ THE HIOGO NEWS (1868～1871, 1876～1888) 神戸文書館

参考文献

- ・ Kommittén för Stockholmsforskning (1992) *Innerstaden: Gamla stan, Stockholms gatunamn (2nd ed.)*. Kommittén för Stockholmsforskning
- ・ 草山巖 (1978) 「居留地警察署長 H. トロチック略伝」『歴史と神戸』 91 号、p.20-23
- ・ 草山巖 (1984) 『兵庫警察の誕生』 慶應通信
- ・ 神戸市役所編 (1924) 『神戸市史 本編各説 下』
- ・ 神戸又新日報 (1918) 「神戸港の今昔 永住五カ国人談」『神戸又新日報』 大正 7 年元旦号
- ・ 小代薫 (2014) 『神戸開港場における内外人住民の自治活動と近代都市環境の形成に関する研究』 神戸大学博士論文
- ・ 坂本学之訳 (2010) 「1850 年から 2008 年のスウェーデンにおける職業教育・訓練—そのひとつの考察」『技術・職業教育学研究室 研究報告 技術教育学の探究 第 7 号』 p.60-68 (原典 Anders Nilsson (2008) *Vocational education and training in Sweden 1850-2008—a brief presentation* 『技術・職業教育学研究室 研究報告 技術教育学の探究』 第 5 号、p.78-91)
- ・ 坂本賢三 (1983) 「幕末期輸入船とその主機」『日本船舶機関学会誌』 第 18 巻第 6 号、p.456-464
- ・ 田井玲子 (2013) 『外国人居留地と神戸：神戸開港 150 年によせて』 神戸新聞総合出版センター
- ・ 谷口利一 (1986) 『使徒たちよ眠れ 神戸外国人墓地物語』 神戸新聞総合印刷
- ・ 谷口義子 (2023) 「居留地三十八番行司局の売却をめぐる」『近代神戸の群像 居留地の街から』 神戸新聞総合出版センター、p.32-65
- ・ 土居晴夫 (1978) 「ストックホルムにて—H・トロチックの子孫を訪ねて—」『歴史と神戸』 92 号、p.27-28
- ・ 土居晴夫 (2007) 『神戸居留地史話』 リーブル出版
- ・ 堀博・小出石史郎共訳 (1980) 『ジャパン・クロニクル紙ジュリピーナンパー神戸外国人居留地』 神戸新聞総合出版センター
- ・ 三上昭美 (1964) 「外務省設置の経緯—わが国外政機構の歴史的研究 (1)」『国際政治』 第 26 号、日本国際政治学会、p.1-21